

～旧約聖書を読んで感じること～

## イサクの妻 リベカ 嫁として

妻サラが死んだ後、アブラハムはイサクのために嫁を見つけることにしました。アブラハムにとって、嫁の条件はただ一つ、自分の故郷から一族の娘を連れてくることだけでした。これはカナン地方では他の宗教、他の神々を礼拝していたため、現地の娘では、信仰深いアブラハムと生活するのが困難です。その点をもっとも警戒していたのです。そこで年寄りの僕に命じ、使いに出します。



シャガール 1931

僕は莫大な持参金を持ってアブラハムの故郷に行き、娘が集まる井戸の傍らで祈りました。「自分に水を飲ませ、さらにラクダにも水を飲ませる娘を、イサクの嫁に」と祈りました。その時、ちょうどアブラハムの甥の娘が水瓶を肩に載せてやって来ました。聖書には「際だって美しく、男を知らない処女であった」とリベカを評しています。

僕が祈ったようにリベカは快く水を飲ませ、何も言わない先に「ラクダにもたっぷり飲ませてあげましょう」と親切を尽くします。娘が一族の者であることが分かり、僕の願いが聞き入れられ、リベカをイサクの嫁にすることが決められました。リベカは僕の願いどおり、すぐに僕に従って親元を離れていきました。幸いなことにリベカは、アブラハムの期待以上のあらゆる美点をそなえていました。リベカは信仰、美貌、愛情、決断力など、すべての点で非常に優れているのです。

## 母として

リベカは苦しみます。双子の息子のうち、長男のエサウはヘト人（ヒッタイト人・トルコ地方）の娘たちを妻に迎えたからです。ヘト人の信じる神はバアルです。「彼女たちはイサクとリベカにとって悩みの種になった」と聖書は記しています。



リベラ 「イサクの祝福を受けるヤコブ」

その上、エサウは一杯の煮物をすぐに食べたいがために、弟ヤコブの「長子の権利を譲るならば」という言葉に飛びつき、長子の権利を譲ってしまうガサツな男なのです。リベカは「ヘト人の娘たちのことで、生きているのが嫌になりました。もしヤコブまでも、この土地の娘の中からあんなヘト人の娘をめとったら、私は生きている甲斐がありません」とイサクに嘆くのです。

リベカは計略を立てます。エサウが祝福を受けることになった日に、先に、おいしい料理、エサウの晴れ着などを用意し、嫌がる次男ヤコブに「お兄さんのふりをして、目が見えなくなった父から祝福をもらいなさい」と命じます。首尾よくヤコブは祝福をイサクから受けます。狩りから帰っておいしい料理を携えてイサクのもとに行ったエサウは、騙されたことを知り、悲痛な叫びをあげ、泣きます。けれども、母リベカの計略であったとは知らず、弟ヤコブを憎み、恨み、父亡き後はヤコブを殺そうと決意します。

リベカはそれを知って、すぐにヤコブを呼び、「お兄さんの怒りが治まるまで待て。そのうちお兄さんの憤りも治まる。お前のしたことを忘れてくれるだろう」とヤコブを自分の里へと逃がしてやります。リベカは長男エサウが、神をバアルでも何でも、どうでもよいと考えていることが絶対認められないのです。同時に、彼の、単純、無頓着で、現利主義な性格もよく知っていました。そして、信仰の継承者として、ヤコブを選び、敢然と策略を実行した女性なのです。お人よしの夫を支えた妻として、父の信仰を軽視する長男を持った母として、すべきことはしたのです。けれどもヤコブを逃がした後、聖書から姿を消しています。葬られたことだけが記録されています。エサウとヘト人の嫁たちのことで、生きていく元気をなくしたのでしょうか。